

馬王堆三号漢墓出土駐軍図が 現代に伝えること

松崎つね子^E

1973年末、湖南省長沙市所在の馬王堆三号漢墓より絹布に描かれた2枚の地図が出土した。1枚は地形図で、大きさは縦横96糎の正方形、縮尺は場所により17万分の1から19万分の1前後のばらつきはあるものの、現在の地図と十分照合し得るもので、その範囲は東経111度～112度30分、北緯23度～26度



図1 「地形図」と「駐軍図」の関係図

の間、現在の湖南省最南部と広東省・広西チワン族自治区の一部を含む当時の長沙国南部であった。もう1枚は縦98糎、巾78糎、地形図の巾を20糎せばめた縦長方形で、地形図の南東部をほぼ2倍に拡大した軍隊配置図で(図1参照¹⁾)、現在の湖南省江華瑶族自治县を主とする地域であった。復元に従った研究者は「駐軍図」と名づけた(図2参照²⁾)。地形図が大所高所から、駐軍図は実戦に際して、それぞれ使用された地図としてセットをなすものだったのであろう。

^Eまつざき・つねこ/文学部教授/中国古代史

¹出典 馬王堆漢墓帛書整理小組「馬王堆三号漢墓出土駐軍図整理簡報」『古地図論集』文物出版社 1977年3月

²出典 『中国古代地図集 - 戦国～元 - 』文物出版社 1990年7月

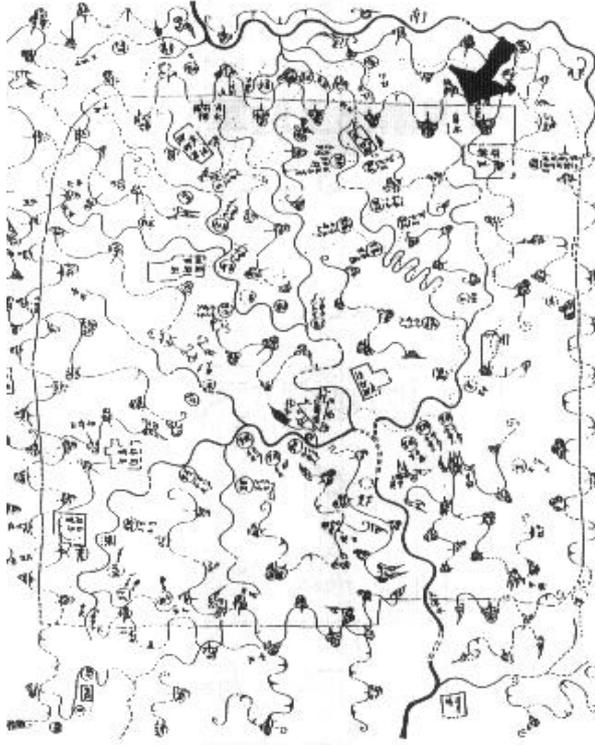


図2「駐軍図」復元図

ではこの墓の被葬者は誰か。三号墓発掘の動機は、これよりほぼ2年前、世界のニュースとなった一号墓の発掘であった。保存の為に注射液がそのまま吸収される肌を保つ、約二千年前の貴族夫人の遺骸が、埋葬時そのまま見つかった墓といえば思い出される方も少なくないであろう。三号墓は未盗掘ではあったものの、密閉度が一号墓に及ばず、30代半ばの男性と鑑定された骨を残すにとどまったが、副

葬品はほぼ完全に残り、その種類等から高位の軍人と推測された。また埋葬年時を記す「木牘」(文字を書く木の札)が出土し、それが文帝12年、即ちB.C.168年であることを明らかにしていた。

同時に発掘された二号墓は、盗掘によってほとんど空になっていたが、墓泥棒はせめてもの功德か?この墓の被葬者を特定できる3個の印を遺していった。これらの印面には〔利蒼〕〔__侯之印〕〔長沙丞相〕(図3参照)とあり、被葬者の名前・身分・官職の所謂自己紹介の、最低条件を満たしていた。皮肉なことに、ほとんど何も残さなかった二号墓が、他の2墓を

も含む被葬者を特定する決め手となった。『史記』・『漢書』に手掛りがあったからである。

二号墓被葬者利蒼は、__の地に封土を持ち、臣下が得られる最高の爵位、列侯を有し、三代長沙王のもとで長沙丞相をつとめ、B.C.186年死亡した人物であった。この家族墓地発掘のきっかけとなった一号墓には、編年を直接記すものはなかったが、他の2墓の編年が確定したこと、また3墓の位置関係から、彼女は__侯利蒼の妻で、三号墓の被葬者は彼女の息子であり、息子に遅れること数年にして死亡したことが明らかとなった。これらのことが判明したことで、この地図は、単に一地方の地形と軍隊の配置を描いたものという以上のことを、我々に語ってくれることになった。当時の政治状況と地図とを関連させて読むことが可能になったからである。



図3 「二号墓出土印」

漢の二代皇帝恵帝から文帝に至る時期、この地域は南に境を接する「南越国」と戦争状態にあった。南越国とは何か。秦の始皇帝は六国併合(中国統一)後、更に嶺南(現在の広東省・広西省地域)に目を向け、

軍隊を派遣、その地に郡制を施した。この時派遣された官吏の一人に趙佗ちやうたという人物がいた。ところが時を経ずしての始皇帝の死とそれに続く秦の滅亡は、この地の官吏・軍隊に抛りどころを失わせるに至った。この機に乗じて趙佗がその地の在地勢力とも結んで建国したのが「南越国」である。漢は全国平定後、その存在を許すことはできなかったが、この国に力を割く余力はなく、建国11年後にしてようやく使者を送り、「南越王」として追認した。だが南越国はその後漢に対しては王を称しても、国内では帝を称す「面従腹背」の姿勢をとり続けた。このことは、二代南越王が文帝を称したことを示す〔文帝行璽〕の金印が、彼の墓から出土したことで実証されている。因に趙佗は「武帝」を称したと史書は伝えている。

緊張を孕んだ両者の関係を熱いものにしたのは、高祖劉邦の死後、呂後の時になされた「南越国への鉄器の輸出禁止」であった。趙佗はこれを「呂后が讒臣^{ざんしん}長沙王の言を聞き入れたため、長沙王はわが国を滅ぼして南越王をも兼ねようとするものだ」と、長沙国の辺邑を攻め、漢側も出兵した。だが炎熱の地に馴れない漢の兵は疫病等に悩まされ、呂後の死を機に兵を引き上げた。趙佗はこれを幸として、他の嶺南勢力とも結んで勢威を誇った。漢にとって南越国は悩ましい存在だったのである。

この駐軍図は、史書が記すこの時期の漢帝国南辺の緊張状態を反映するものとして見ることはできるのではないかと。但し三号墓被葬者は、この時期20歳前後のはずであり、先の彼を軍人とする推定が正しいとしても、実戦の指揮に使用したかは微妙であり、資料として手元に置かれていたものと見るべきなのかもしれない。結局南越が臣を称して参朝したのは、文帝の次の景帝の時代であり、しかし自国内では依然として帝号を称しつづけたという。漢の体制が整った武帝の時、5代93年にして滅んだ。

この地図が語ることは多いが紙数の関係もあり、テーマを一つにしぼって以下述べてみたい。地図の縁に沿って地図内に大きく描かれている線は軍事境界線であろう。南東辺にかたよってではあるが、ほぼこの線に沿って点在する不整形の方形と、その枠内に記された「周都尉軍」「司馬得軍」「徐都尉軍」等の文字がそれを語っている。方形は城壁を意味し、枠内の文字は、そこに配備された軍隊名だからである。「都尉軍」というのは、中央政府軍を意味するので、この地図は前述呂后期のものとして見てよからう。この地図は南が上位であり(この点いうべきことがあるが、ここでは措いて)、河川は南を上流として北流する多くの支流が書き込まれ、やがて図の下部中心地点に位置する「大深水」に合流している。それら川筋に多くの円圏と、その中に文字が書き込まれているのが見える。これは当時の行政単位(郡-県-郷-里)の末端「里」を意味し、中の文字は里名である。これから問題にしたいのは、その円圏の外に書き込まれた「但書き」である。見易いように、その一部を拡大して図の下部に添付した。因に、合流点二つの河にはさまれて位置する三角の保壘は司令部、その外にある_____は河から水を引いている貯水池であろう。

その部分を例にすると、円圏の右から「三十五戸、今毋人(今、人なし)」、
「四十三戸、今毋人」、「并路里(「胡里」に路里を併す)」とある。

これは各里本来の戸数と里の現況を記したものであろう。辺境の地のデータとはいえ、当時の里の配置・規模・人口等を知る貴重な史料といえるが、ここで関心に即せば、ここに書き込まれた現況は、この地の軍による綿密な調査によるものであろう。というのは最南部の軍事境界線の向こう側(最上部)の地域は、里名のみで戸数・現況の記載はない。里名が記されていることは、長沙国内と認識されていたが、把握できなかったことを意味しよう。

ところで議論をもどして、その横に加えられた「今毋人」の文字は、何を意味するのか。これには別の表現もあり、前掲三つの里を河川沿い東にいったところに「不反」(返らず)とある。以上、「現況」についての但書き「今毋人」「不反」「并〇里(強制的他里への併合)」は、戦場になったことによる逃亡・強制立ち退き・他里との統合等を意味すると考えられる。しかし反面、「今は人がいない」、「まだ返ってこない」というこの表現には、いずれ帰村するであろう未来を予定する調査者の意志も感じられるように思う。また「今毋人」「不反」の里が、この地図を作製する段階で、廃村になって久しいものでなかったことは、戸数が書き入れられていることが証明している。調査時無人であっても、データを把握できる時点ではあったということになるからであり、それはこの当時の「戦争」による「廃村」を意味していよう。

とすれば、辺境にあって、それなりの平和を享受し、日々の暮らしを立ててきた人々の生活が、根こそぎにされた現実が、そこに見えてくる。史書は「長沙、その半ばは蛮夷」と、長沙国が「蛮夷」と漢人の雑居する地と伝えている。「蛮夷」が多く集住するのは、やはり南越等「蛮夷の国」と境を接する長沙国南辺であろう。彼らはそれら嶺南の民と族を同じくしたはずである。ということは、ここが戦場になった時、里々に住む「蛮夷」・漢人、それに軍、それぞれの関係は過酷なものとならざるを得なかったであろう。軍隊を除けば無人の荒野に等しい状態に至った原因の一端は、それに帰せるのかもしれない(以上、南越関係記事は『史記・南越伝』、『漢書・両粵伝』による)。

この地図を見ていると思いは無限?に広がり、二千二百年に^{なんなん}垂とする時空を越えて今日的テーマにもつながってゆく。イ・マ・ヒ・ト・ナ・シ、この地図を眺める度にシンとした気分させられる。地図は楽しい山歩きに必携のものである。だがこの地図は、戦争と地図という、地図の持つコワイ側面をも見せてくれている。

馬王堆漢墓から大量の文字史料が出土した。それらは絹布・竹簡に書かれた書籍・副葬品リストの類であった。これ以降、墓中からの史料の出土は特別なことではなくなっている。種類もこの他に法律・裁判関係文書・占書等、豊富になっている。かつて、二千年前の人々の手になる生の史料を目にできるなど夢想だにできなかった(今世紀初頭、中国西北の砂漠地帯で発見されて以降、その地の軍事施設から大量に収集されている木簡は別とする)。数年前、専攻紹介の誌面に、現在の中国古代史研究の一端に触れて、「せめて十年後に生まれたかった」とつい書き加えてしまった。忘れたころ、赴任に当たって読まれたのであろう、他専攻の新任の方に、こんなこと書く人、どんな人かと思ったといわれ、筆のすべりを思い出させられた。しまったと思いつつ、心に深く聞いてみれば、やはりいつわらざる心境といえようか。